

浅羽町学校給食センター建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

北ハサマ遺跡

1991年3月

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

序 文

浅羽町学校給食センターは、開設以来、既に20年を経た上に1,000名を予想して出発した給食供給人数も、人口の急増に伴ない3,000名を超える事態となり、増設に次ぐ増改築で急場をしのいで来たが、早期に移転新設をする必要に迫られ、関係者一同、鳩首協議し、検討して来たところであった。

幸にして、地権者の協力を得られることとなったので、一部に埋蔵文化財の存在が懸念されないことも無かったが、浅羽1万石の穀倉地帯の中心部に位置する平坦部であり、確認調査をすれば、本調査の要は少ないのでは……………？との予想のもとに用地が決定され、建設用地として推進されることとなった。

今迄の常識から見た場合、当地区の歴史はせいぜい数百年と考えられて来たが、今回、出土した国分寺瓦をはじめ、多数の土師器、須恵器類は、当地方の、今後の開発に伴なう発掘調査の結果と相俟って、現在進められて居る町史編纂の有力な資料となるべきものと考えられ、一挙に千数百年を溯ることとなり、郷土の歴史を書き変えることとなった。

この様な成果は、地域住民の郷土の歴史に対する理解を深めると共に、今後の我々のあり方に対しての連帯感を育てる上で、極めて有力な史実を与えたものとして、嬉しく思っている。

本調査にあたり、日本考古学協会員 柴田 稔氏をはじめ、格別の御協力を賜った関係諸氏に対し、心から御礼を申し上げ謝筆。

平成 3 年 3 月

浅羽町教育委員会

教育長 岡 本 幸 夫

例 言

1. 本書は、1989年度事業として行われた浅羽町学校給食センター建設工事に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 現地調査は1989年7月11日から8月10日まで行い、資料整理・報告書作成作業は、1990年度に行った。
3. 調査の箇所は、浅羽町新堀字北ハサマ166-2、167-2、168-2の一部である。
4. 基準杭の設置、遺構の実測など、現地での測量業務および成果品の製図は、株式会社フジヤマに委託し、補正は柴田稔が行った。
5. 測量は、国家座標に基づいている。座標の位置は、全体図に記した。
6. 出土遺物の復元は岡本春子が行い、実測・写真撮影は柴田稔が行った。
7. 本書の執筆・編集は、柴田稔が行った。
8. 調査の体制は下記の通りである。
調査主体者 浅羽町教育委員会 教育長 岡本幸夫
調査担当者 柴田 稔（浅羽町文化財保護審議委員）
9. 発掘調査および本書の発刊に係わる事務は浅羽町教育委員会社会教育課が担当した。
10. 当遺跡は、静岡県文化財地名表に従い、北ハサマ遺跡としたが、現在進められている静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査では、新堀遺跡と総称している中に含まれている。

目 次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	2
III 遺構の概要	4
IV 出土遺物の概要	8
V ま と め	13

挿 図 目 次

第1図 北ハサマ遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図 北ハサマ遺跡全体図	4
第3図 D-1 実測図	5
第4図 J-1 実測図	6
第5図 E-1～3 実測図	7
第6図 出土遺物拓本 (E-1 内)	8
第7図 出土遺物実測図 (D-1、J-1 内)	9
第8図 出土遺物実測図 (K-1 内)	11
第9図 出土遺物実測図・拓本 (K-1、E-1・2 内)	12

図 版 目 次

図版1 (上) 完掘状況 (西側から)	(下) J-1 調査状況 (南側から)
図版2 (上) D-1 調査状況 (北側から)	(下) D-1 遺物出土状況
図版3 (上) E-1 完掘状況	(下) E-2 調査状況
図版4 (上) E-2・3、K-1・2 調査状況	(下) E-3 遺物出土状況
図版5 D-1、J-1、K-1 内出土遺物	
図版6 K-1 内出土遺物	
図版7 K-1 内出土遺物	
図版8 K-1、E-1・2 内出土遺物	

I. 調査の経過

調査に至る経過 浅羽町学校給食センターは、1971年11月に、町内の中学校、小学校、幼稚園への給食のために開設された。その後、1980年代の後半になると、漏水を起こすなど、設備面での老朽化が目立ち始めた。一方、町内の人口は、1970年代後半を境として、微増傾向から一転して急増を開始し、給食センターの開設時には予測すらできなかったほどの児童・生徒数となり、従来の施設では給食業務にも支障がでるようになった。

このため、施設の移転新設が計画された。

移転先、施設の内容などの協議が進み、1988年度には、移転先、建設計画なども内定した。

建設地の選定には、埋蔵文化財の所在なども十分に配慮されたが、土地利用計画なども含めた諸条件の中で、周知の遺跡であった北ハサマ遺跡の一角に決定せざるを得なかった。

調査の経過 以上のような経過に伴って、町教育委員会は、1989年3月22日から25日にかけて、用地内の遺跡確認調査を行った。

確認調査の方法は、用地内の6箇所¹に2×2mのグリットを設定し、遺構・遺物の埋蔵状況を確認める程度のものであったが、遺跡の概要は把握できた。

確認調査の結果に基づいて協議を行った結果、本調査は1989年度事業とし、調査対象範囲は、建物部分だけとした。

調査は用地取得などの手続きが終了した後の、7月11日に開始した。

7月11日から13日にかけて、バックホーを使用して表土除去作業を行い、14日には発掘機材を搬入し、17日から本格調査を開始した。

この時期には、町内では小学校新設用地内の遺跡調査（古新田遺跡）も行われており、浅羽町始まって以来初の2箇所同時調査となった。

しかし、測量機材・写真機材などは、一つの遺跡を調査する分しか手配できないのが現実であり、双方の調整を行いながら進行しなくてはならない不便さを伴った。

調査は、真夏ではあったが順調に進み、8月9日にはケーブル方式の写真測量を行い、10日には、1号土坑・1号住居跡の遺物を取り上げ、11日に機材を撤収して現地での調査を終了した。

資料の整理は、1990年度の事業として行われ、1991年3月の報告書刊行をもって、発掘調査の全作業を終了した。

II. 位置と環境

県道袋井大須賀線は、JR袋井駅西側のガードをくぐると、原野谷川の形成した自然堤防上を南下する。この自然堤防を浅羽町諸井・浅羽・浅名へと進む間、左手に小笠山塊の老化した段丘を眺めることができる。この段丘上には、弥生時代の墳墓群である北山遺跡、古墳時代の豪族居館とみられる古新田遺跡など、多くの遺跡が所在している。また、自然堤防上には、十二所遺跡・高道遺跡を始めとする弥生時代の集落跡が連続的に立地している。

浅名のV字形交差点を右に折れると、浅羽町南部の海岸平野地帯に向かうことができる。豊住・新堀までは、自然堤防を視認できるが、以南は、東西に細く長い砂堤列が目立つようになる。梅山・松原などの旧東浅羽、同笠・湊などの旧幸浦は、すべて砂堤列上の集落である。

さて、北ハサマ遺跡は、自然堤防上の集落としては最後に確認できる新堀地区に所在する。

発掘調査の対象となったのは、新堀字北ハサマ166-2、167-2、168-2に当たり、現在は浅羽町学校給食センターの下になっている。

江戸時代前期に作られた絵図面(1)を見ると、即東側までラグーンが進入している。古い地籍図を参考にする、調査地点からラグーン縁までは、100m足らずである。この状況がさらに古くからあるという前提に立てば、当遺跡は水辺に立地していたことになる。また、遺跡の南側には、江戸時代の横須賀藩と見付宿を結ぶ主要道であった横砂道が通っている。この横砂道は、江戸時代初期以前は、ラグーンの西側を五十岡に向かって迂回し、小笠山麓を通過していたようである。このことを換言すれば、北ハサマ遺跡は、水辺に立地すると同時に、遠江国分寺瓦を生産した竜天薬師堂古窯などの清ヶ谷古窯跡群と、遠江国府を結ぶ主要道に面したことのある遺跡ということができる。

北ハサマ遺跡付近の自然堤防上には、豊住地区の常楽寺・石原・居廻遺跡、新堀地区の黒清・屋敷通遺跡、梅山地区の青木・西立・馬場遺跡などの、弥生時代から鎌倉時代の遺跡が隣接して立地している。

これらの遺跡は、網状に流れた旧原野谷川の流路によって不連続をみせるだけで、現実には、すべてを包括して一つの遺跡群と呼び得る景観である。そのような主旨で、この付近一帯を梅山遺跡群と総称した(2)が、調査が進んだ近年では、この呼称も必ずしも的確とはいえない状況である。

平安から鎌倉時代の遺跡に限ってみると、集落の立地は散在的で広範囲であることが理解されつつあり、古代から中世の一つの村落に、多量の遺跡名が付けられる可能性が高くなっている。

中世に限れば、すでに遺跡名についての問題点は指摘している(3)が、北ハサマ遺跡の周辺では次のようなことが指摘できる。

当遺跡の南側には、横砂道が通っていたことは先に記したが、この横砂道は、新堀地区の東側から南側へと迂回するようにして中畦堤に接続している。中畦堤は、近世から近代に至るまで、

各種の水争いの原因になっているが、中世の末頃は、この堤防を境として北側を上輪村、南側を下輪村と総称し、平野の村を大別していた事実がある。したがって、中世という観点に立てば、中畦堤を境として異なった遺跡名、あるいは遺跡群とすることが考えられる。この場合、当遺跡は、黒清・屋敷通遺跡と共に、もっとも主体的に遺跡が分布する新堀という大字を生かして、新堀遺跡、あるいは遺跡群と呼んでも良いように思われる。しかし、本報告書では従来の名称に従って北ハサマ遺跡とする。

註

- (1) 原家文書 「貞亨3年の絵図」 (2) 文献第3図参照
 (2) 柴田 稔 「青木、馬場第1・第2遺跡」 第1章 遺跡の立地と環境 浅羽町教育委員会 1984
 (3) 柴田 稔 「権現山遺跡」 IV 遺跡の概要 浅羽町教育委員会 1987



- 26、常楽寺 27、居廻 28、石原 29、屋敷通 30、北ハサマ 31、青木
 32、黒清 33、馬場 34、西立 35、宮西 36、野島 37、松山 42、地蔵山古墳

第1図 北ハサマ遺跡周辺の遺跡分布図（静岡県文化財地名表引用）

Ⅲ. 遺 構 の 概 要

調査では、次のような遺構が検出された。

土坑 (D-1)	1 基
住居跡 (J-1)	1 軒
溝跡 (K-1、K-2)	2 条
井戸状遺構 (E-1～3)	3 基
小穴群	

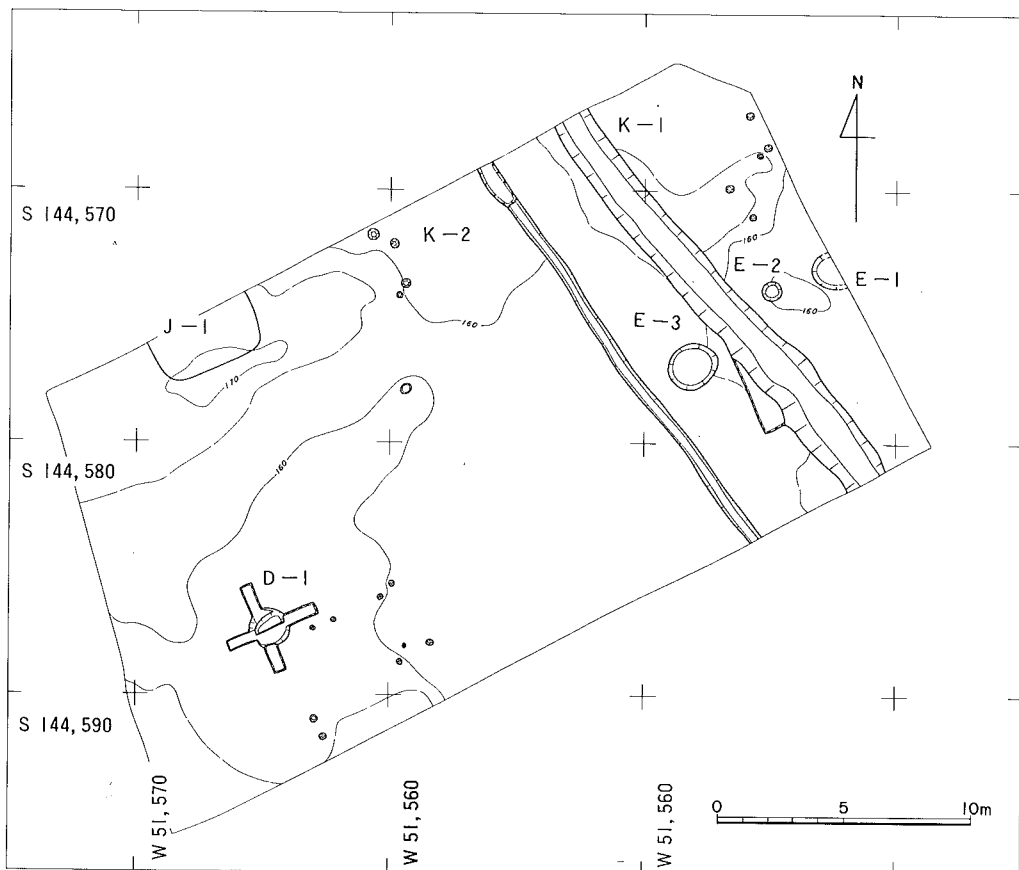
これらの概要は下記の通りである。

D-1 (第2・3図)

概要 径約 1.5 m、深さ約 0.45m で、発見面の形状は円形を示し、底面は平坦である。

遺構内の堆積土は、4層が炭化物を多量に含んでいる以外は、発見面の粘土層と類似し、壁の検出は困難だった。

出土遺物 第7図1～7に示した土師器が出土したが、他の破片はほとんど見られなかった。



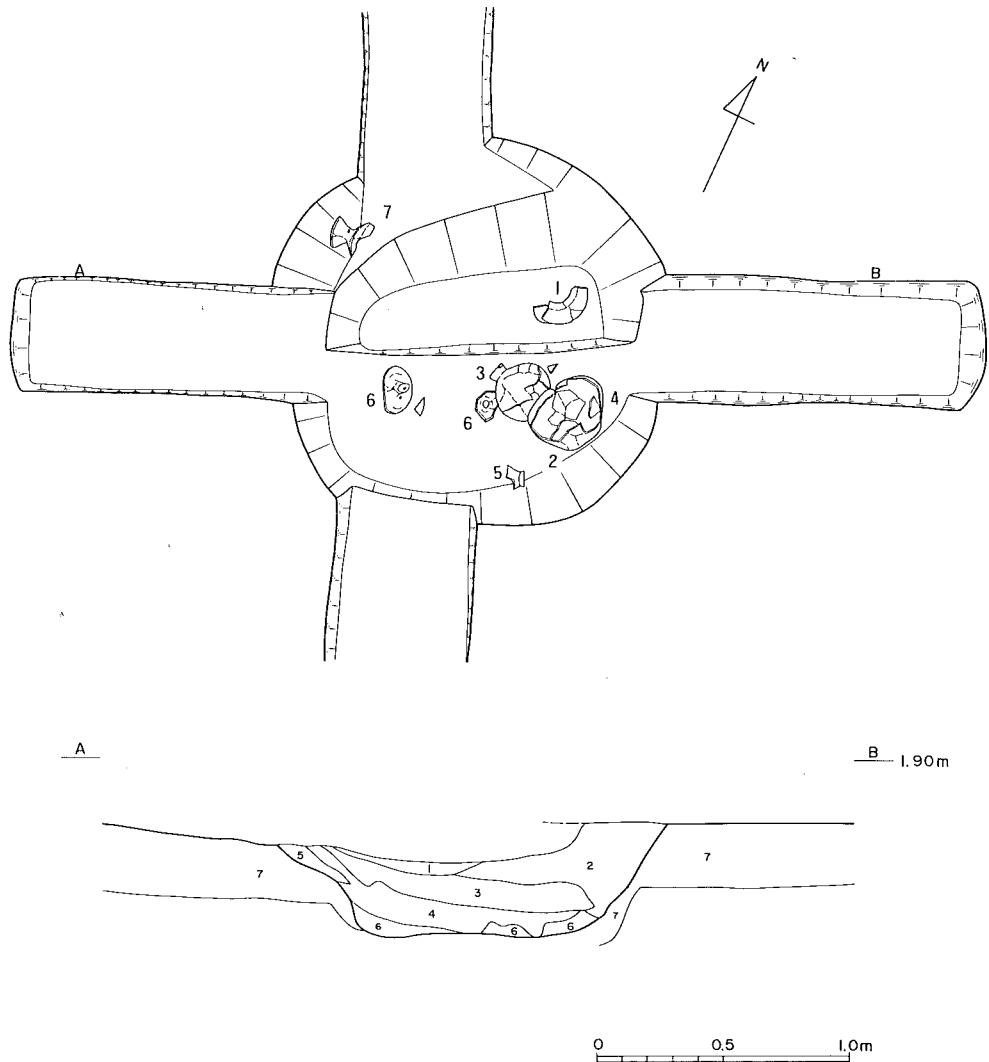
第2図 北狭間遺跡全体図 (縮尺 1 : 300)

2～7は2・3層から出土し、1は6層から出土した。2～7については、一括性の高いものと考えられる。

時期 一括遺物から古墳時代前期でも4世紀代と考えられる。

J-1 (第2・4図)

概要 一部が用地外にまで広がっているが、表土直下から炭化物・焼土の分布範囲が確認された。その範囲を確かめたところ、東西約4.5m、南北約2.2mで隅丸方形となった。



1、炭化物の薄層を含む淡暗青灰色粘土 2、淡暗青灰色粘土（一括土器を含む） 3、褐青灰色粘土に少量の炭化物・焼土を含む 4、炭化物層（基本的には炭化物の薄層が連続的に積もり、その間を褐色粘土が埋めている。） 5、灰色気味の黄褐色粘土 6、灰色気味の黄褐色粘土 7、青灰色粘土に分解の進んだ鉄分を含む

第3図 D-1 実測図

柱穴、壁溝、貯蔵穴などは検出できなかったが住居跡と考えた。

出土遺物 南東隅の炭化物下から第7図8・9に示した土師器が出土した。同一の遺構に属するものなのか確認できなかったが、関連した遺構の検出ミスと考えた。

時期 出土の土師器からD-1と同一時期と考えられる。

E-1 (第2・5図)

概要 一部は用地外に伸びている。径約1.5m、深さ約0.5mで井戸状とも土坑状ともいえる。

3・4層は遺構の外側になり、本来はU字状の断面になる。

出土遺物 1層から第9図15が出土した。

時期 鎌倉時代後期であろう。

E-2 (第2・5図)

概要 径約0.7m、深さ約0.5mで井戸状の断面を示している。内部堆積はE-1と類似している。

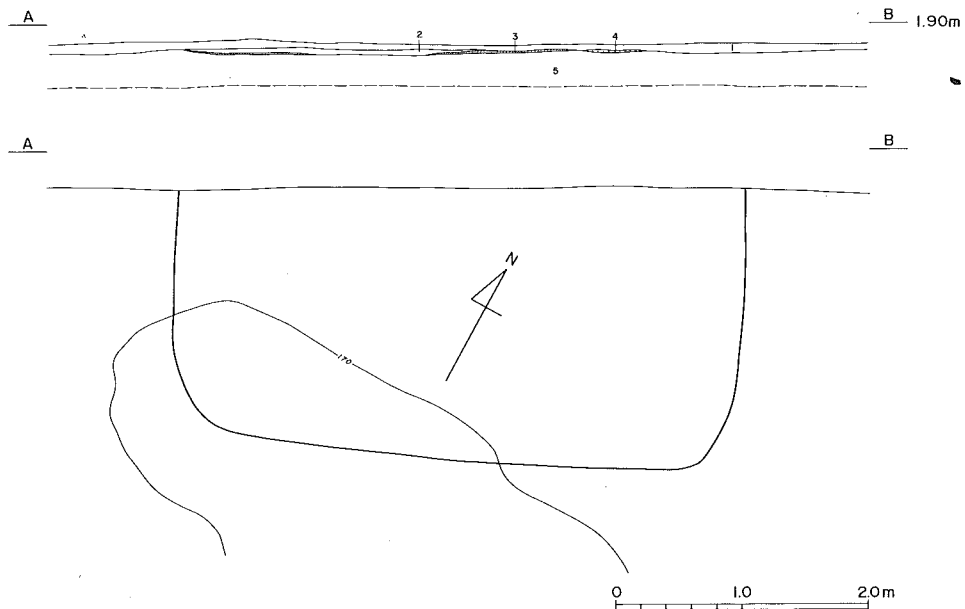
出土遺物 第9図11が1点だけ出土した。

時期 平安時代後期であろう。

E-3 (第2・5図)

概要 約1.8×2mの不整形円形を呈し、深さは約0.6mある。底面は極度にグライ化して確認できなかった。

出土遺物 第6図に示した土器の他、脚付き甕の碎片などが出土している。なお、第6図に示



1、耕作土 2、少量の炭化物を含む黄褐色土 3、炭化物層 4、焼土 5、黄褐色粘土

第4図 J-1実測図

した土器は、保存状態は極めて悪いが、頸部の大型破片であり、拓本は文様の残存した部分だけを抽出したものである。

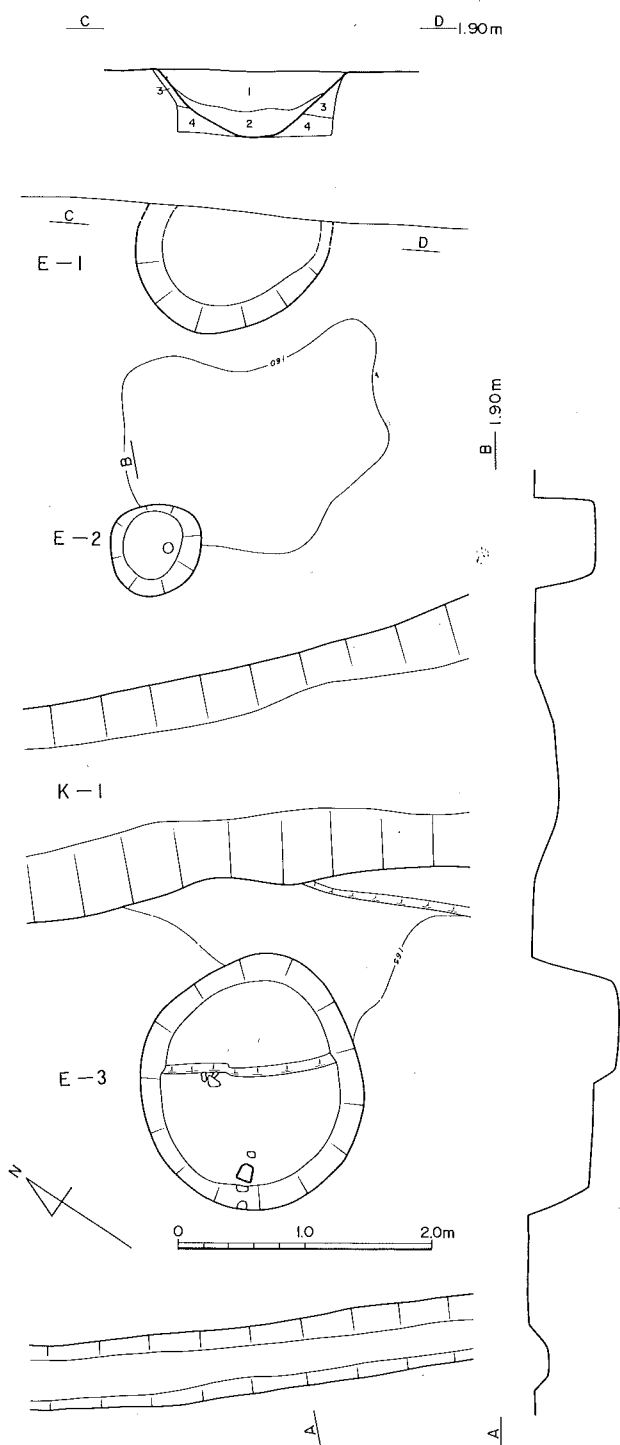
時期 出土の土器が遺構の時期であるという前提に立てば、弥生時代後期でも前半に属するものである。

K-1 (第2・5図)

概要 幅2m前後、深さ0.2m前後で調査区を横断するように約37m確認された。内部の堆積は、有機物を少量含む淡暗褐色粘土であるが、多量の遺物を含んでいた。

出土遺物 出土量は極めて多い。主なものは、奈良時代の土師器・須恵器であるが、平瓦片2点の他、平安時代の陶器もある。(第8図、第9図1～11、13・14、16・17) 発見面及び上層は、極少量の平安時代の陶器片を含むが、大半が奈良時代の土師器・須恵器であった。また、土師器は細片が目立った。これらの遺物を取り上げた下から第9図10・11が出土した。この陶器は、いずれも墨書が見られる。

時期 上層から多量に出土した奈良時代の遺物は、投棄遺物であり、溝に伴うのは平安時代の遺物であろう。したがって、溝の時期は、平安時代でも10世紀後期頃であろう。



- 1、暗茶褐色粘土 2、暗青灰色粘土
3、黄褐色粘土 3、緑暗青灰色粘土 (グライ土)

第5図 E-1～3 実測図

K-2 (第2・5図)

概要 幅0.6m前後、深さ0.2m前後で、K-1に併行するように約37mが確認された。内部の堆積土は淡暗褐色粘土である。

出土遺物 弥生土器あるいは土師器と思われる細片が少量と、半壊のガラス小玉1点が出土したが、須恵器や陶器は検出されなかった。

時期 出土遺物から考えれば、弥生時代後期あるいは古墳時代前期であるが、K-1と併行していることが偶然と解釈でき難い点もあり、時期不明としたい。

小穴群 (第2図)

調査区から合計19の小穴が検出された。

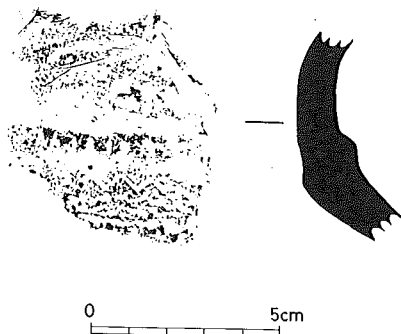
IV. 出土遺物の概要

K-1内から出土した遺物が大多数である。出土遺物の主な物は、第6～9図に示したが、以下にその概要をしるす。

弥生土器 (第6図)

E-3から出土した。図は、壺形土器頸部破片である。断面かまぼこ形の隆帯を一条巡らし、頂部に半折の竹管と思われる工具による爪形文が施され、その下に鋸歯に近い波状文が見られ下端に1あるいは2条の沈線が巡っている。

菊川式でも古い段階、あるいは二之宮式に属するであろう。



第6図 出土遺物拓本 (E-3内)

土師器 (第7図、第9図16)

壺形土器 (第7図1・8) 1は、いわゆる柳ケ壺である。体部から底部は発見されなかった。口縁端部には、3本1対の棒状隆起文が3あるいは4箇所につけられている。隆起文の頂部に施文があるかは、磨耗が激しいために分からない。頸部は直立気味であり、頸部と体部との境には粘土紐貼付けの隆起帯が見られ、頂部には刻目が斜めに施されている。外面は、口縁下段部に斜め刷毛調整が施され、他の部分はすべて斜め刷毛後、篋磨き調整である。内面は、口縁部は横及び斜め刷毛後、篋磨き調整であるが、他の部分は磨耗のため不明である。

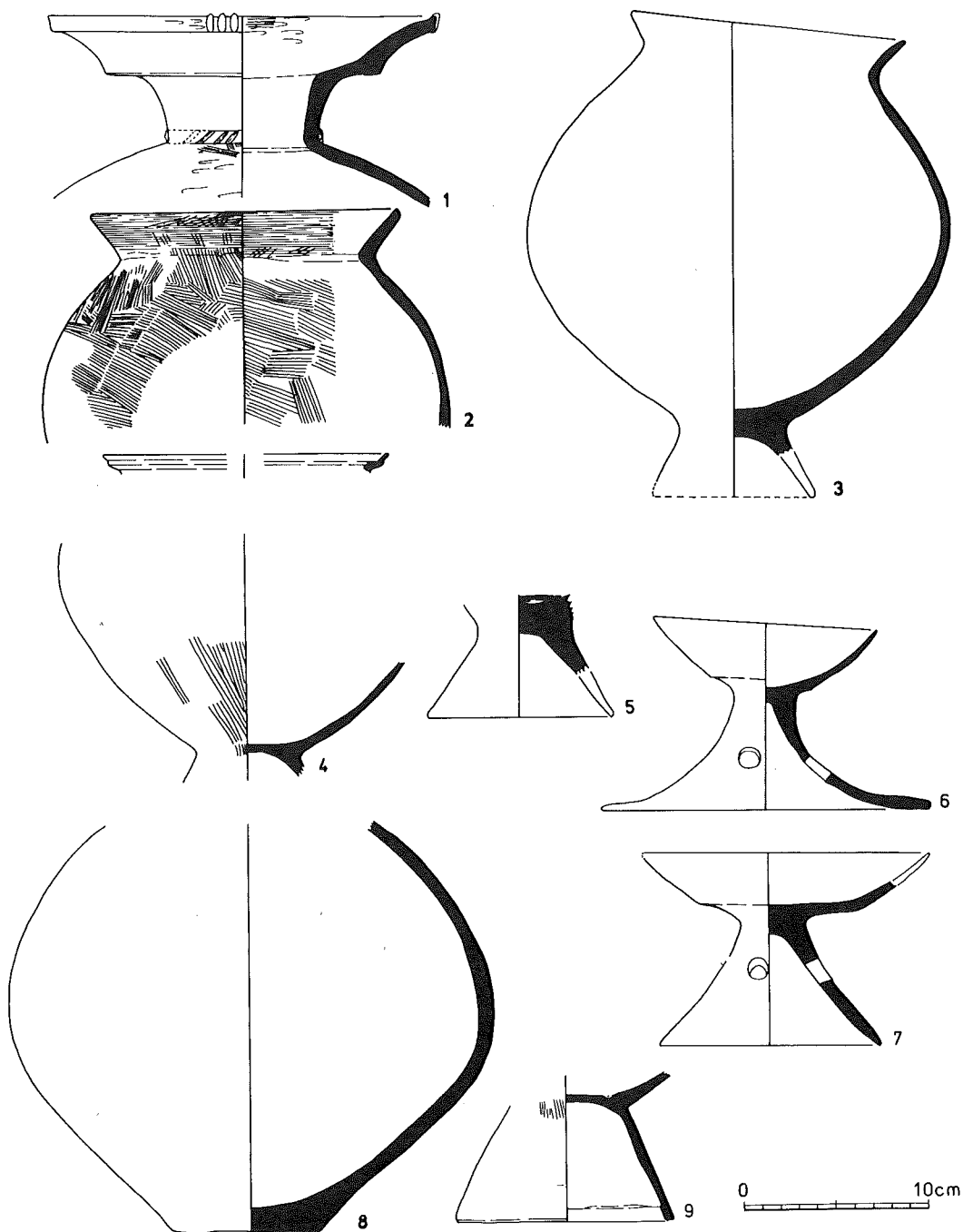
8は、体部以下だけが発見された。保存状況が悪いために調整痕は観察できない。底部中央がわずかに窪み、その部分だけに木葉痕が見られる。

甕形土器 (第7図2～5・9) 4・9は、S字状口縁の脚付き甕である。4は、発見段階ではほぼ完形であったが、きわめて保存が悪く復元できなかった。とくに、口縁部の保存が悪く、

実測はスケッチ程度である。9は脚部と体部下半の破片である。

3・5は、脚付き甕である。両者ともに保存状況はきわめて悪く、5の底部内面の横刷毛調整以外の調整痕はまったく観察できない。3で見られるように、球形に近い体部と短い脚部に特徴がある。

2は、脚の有無が確認できない。口縁部内外面は斜め刷毛後、横撫で調整、体部内外面は斜め



第7図 出土遺物実測図 (D-1、J-1内)

刷毛調整が施されている。

高球形土器（第7図6・7） 両者共に調整痕は観察できない。6は、小さな坏部に大きく開く脚部が付く。脚には円孔が3箇所見られる。坏部下端には、稜がわずかに観察できる。7は浅い坏部にあまり開かない脚部が付き、円孔が3箇所に見られる。坏部下端には甘い稜が見られる。

坏（第9図16） 須恵器を模倣した坏であろう。口径11.8cm、器高2.7cmで、調整痕は観察できない。

須恵器（第8図、第9図1～9）

蓋（第8図1～13） 口径13～16cmの例の他に、口径約25cmの大型の例がある。前者はさらに細分できるのであろうが、当遺構の資料だけでは困難である。つまみは、扁平な擬宝珠形に近いもの（1）も含まれているが、大半は擬宝珠形である。1例だけだが剣菱形の擬宝珠形（8）のものがある。つまみの径は2～3cmで、3cmを越えるものはない。口縁部は、下方に捻り出して端部を丸くおさめているが、1例だけ上に突出するもの（1）がある。これは、捻り出しに加えて、側方から強く押さえながらの横撫でによって作られたものかも知れない。天井部上半は、2～3回転の篋削りが行われているが、その方向はすべて逆時計回りである。

高台坏（第8図14～24） 14～20・24は有蓋高台坏、21～23は無蓋高台坏であろう。

有蓋高台坏は、口径11cm代の例（18）、口径13～14cm代の例（14～17・19）、口径16cm代の例（20・24）の3類に分けられる。体部は、内弯気味（14）、外弯気味（15・17・19・20）、直線的（16・18・24）なものがある。体部と底部との境には、強い横撫でによって稜が見られるが、14・19のように、甘い稜の例と、15・17のように鋭い稜の例とがある。底部は、15のように高台から突出するものもあるが、平坦な例が多い。高台は、丸味を持った大きな例が圧倒的に多いが、18・19のように内面から強い横撫でを施して、断面三角になる例もある。

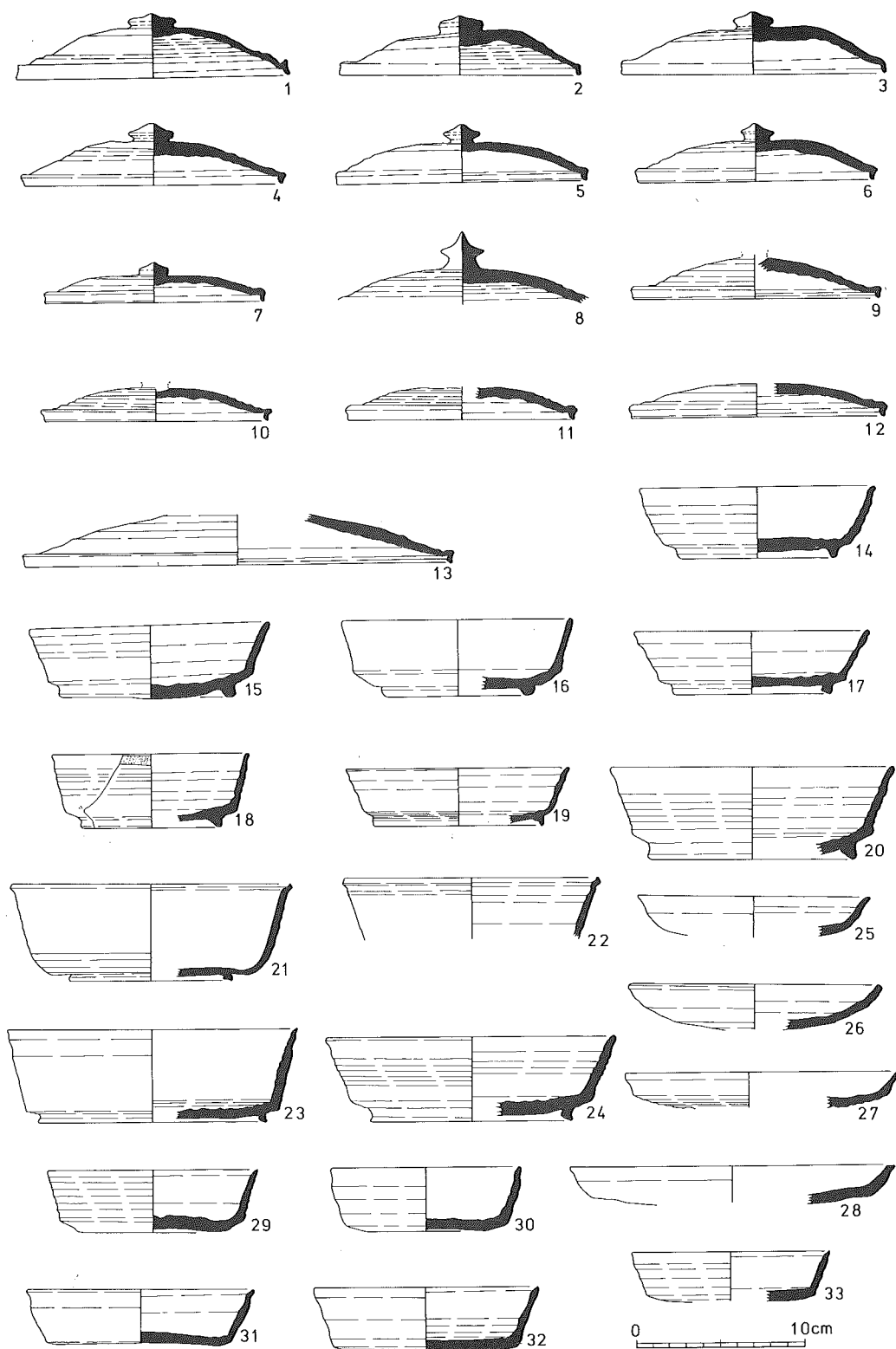
無蓋高台坏は、22が口径15cmで中型になる以外は、いずれも大型である。21・22は口縁端部を受口状に調整している。高台はいずれも小さい。

無高台坏（第8図29～33・第9図1～6） 箱型の形態を示す第8図29～33・第9図1・2と、碗型の形態を示す第9図3～6がある。箱型の坏は有蓋になる可能性が高い。

箱型の坏は、口径12cm前後で深さのある例（第8図29・30・第9図1・2）と、口径13cm前後で浅い例（第8図31・32）がある。底部は平坦であるが、体部との境に強い横撫でを施して稜をつける例（第8図29・30）と、稜を持たない例（第9図1・2）、及びその中間（第8図31・32）がある。口縁部は、いずれも上外方に伸びる特徴を持っている。

碗型の坏には、底部の丸い例（第9図3）と、底部の平坦な例（第9図4～6）とがある。3は底部を逆時計回りの篋削り調整、他は篋切り後撫で調整である。

皿（第8図25～28） 28のように底部が平坦で、口縁端部を平坦に作り大型になる例は、盤としても良いかも知れない。口縁端部の形態には多様性がある。

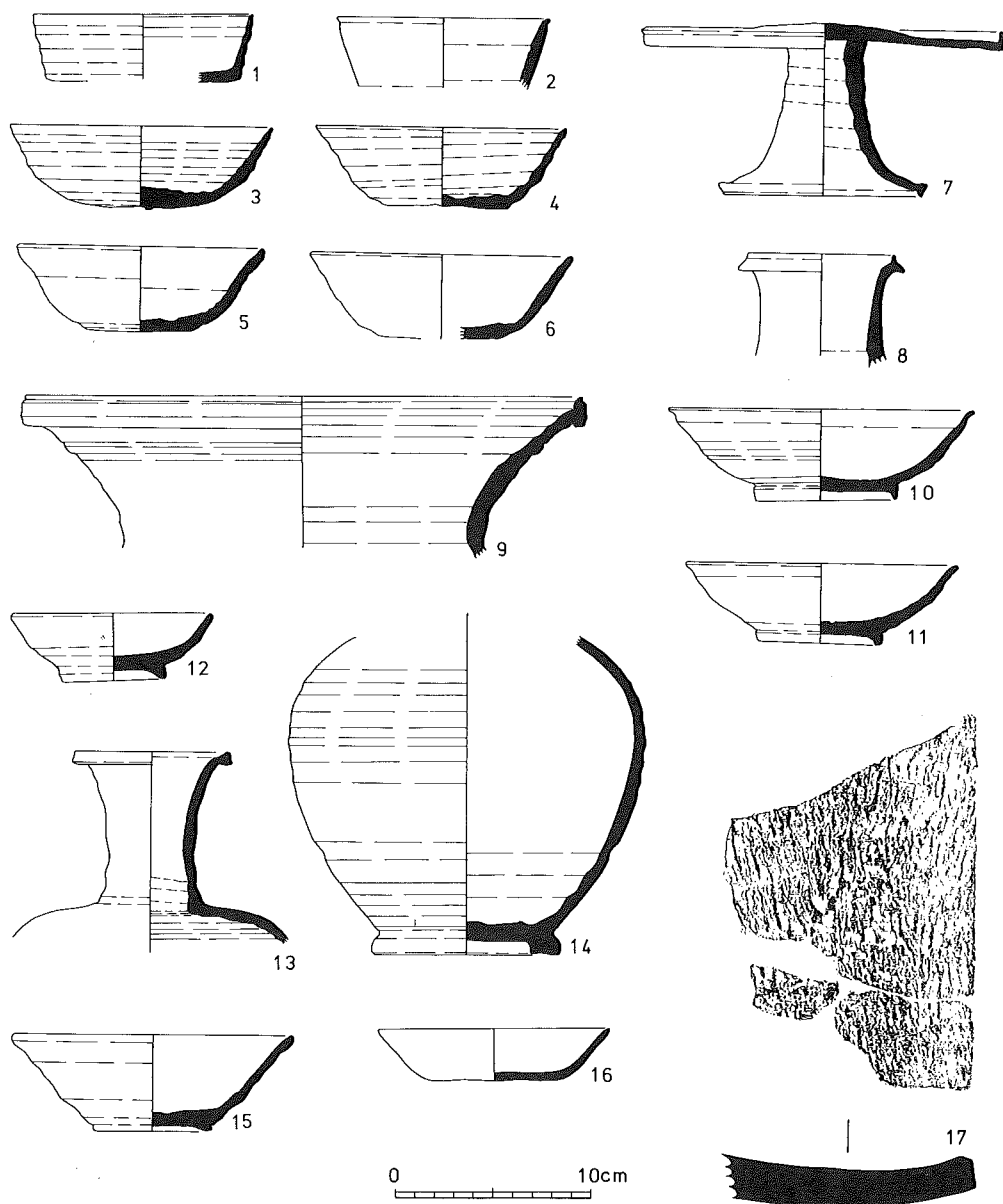


第8図 出土遺物実測図 (K-1内)

脚付き盤（第9図7） 盤に脚を付けた形態であるところから、脚付き盤としたが、いわゆる高盤である。機能的には高坏と同様であろうから、高坏でも良いのかも知れない。

壺（第9図8） 細頸壺の一種であろう。口縁部の作りが第8図1の口縁端部と類似している。

甕（第9図9） 口縁端部を上下に肥厚させている。頸部上端には断面がかまぼこ型になる隆帯が1状巡っている。



第9図 出土遺物実測図拓本（K-1、E-1、2内）

陶器（第9図10～15）

碗（第9図10～12・15） 10・11の高台は、円盤貼り着け後の捻り出し高台の可能性が高い。施釉は認められない。いずれにも墨書が見られる。12は小型の碗である。15は、粗雑な作りで、高台には刳殻痕が見られる。

瓶（第9図13・14） 良く似た個体であるが別個体である。緑色の釉の発色が見られるが自然釉と思われる。

その他の遺物

以上の他に瓦破片2点、ガラス小玉1点、土師器細片多数が出土している。

V. ま と め

当遺跡は、位置と環境で記したようにラグーンを隔ててはいるが、清ヶ谷古窯跡群と関連した遺跡ではないかという予測を持っていた。調査の結果からは、これを確認する資料を得ることはできなかったが、清ヶ谷古窯跡で生産された可能性の高い須恵器の出土は、今後の研究に役立つことであろう。また、保存状況はきわめて悪いものの、土坑内より一括して出土した土師器も、古墳時代前期の土器編年に貴重な資料となるであろう。

したがって、ここでは、その両者について雑感を加えてまとめとしたい。

D-1内出土の土師器について

青木遺跡AK6からは、14個体の一括資料が出土しているが、これを青木遺跡の土師器編年での第3段階の基準資料（1）とした。これは、坂尻遺跡で第2段階としたものに相当する（2）。青木遺跡の第1段階は、坂尻遺跡の第1段階と同じと見て良いであろうから、青木遺跡の第2段階が坂尻遺跡では欠落しているのか、青木遺跡で設定したような段階が存在しないのであろう。しかし、同じ坂尻遺跡の1989年度調査のX層出土土器が弥生土器であるという前提に立てば（3）、青木遺跡でいう第2段階は存在しなくなる可能性が高いといえる。

D-1内出土土器は、AK6出土土器と同時期であろうが、AK6の資料中でセット関係が不十分であった高坏・脚付き甕の好資料が検出され、この段階のセットを豊富にすることができた。

K-1内出土の須恵器について

K-1内出土の須恵器は、基本的には古墳築造が行われなくなった時期のものと考えることができる。また、その内容は、水ヶ谷奥古窯跡（4）、五郎エ門古窯跡（5）出土の須恵器に近似していると考えられる。しかし、清ヶ谷古窯跡群での8世紀の須恵器編年は十分とはいえない。

静岡県西部地方の8世紀の須恵器編年は、湖西古窯跡群の製品を中心に進められている（6）。また、これら須恵器の年代観は、伊場遺跡出土の木簡（7）が有効に作用しているが、不確実な要素も残っている。

K-1内出土の須恵器を、湖西古窯跡群を中心とした後藤氏の編年(6)に従って検討する。

有蓋高台坏については後に検討するとして、他の須恵器は、第9図3などの一部を除いてはⅥ期の須恵器と見て良いであろう。

底部を篋削りで平坦に調整した箱型の坏(第8図29~33、第9図1・2)は、底部外周に強い横撫でを施して面をもつもの(第8図29・30)と、面をもたないものが有り、編年的には後者の方が新しい要素である。また、碗型をした坏(第9図4~6)も、4よりは5・6の方が新しい要素を持っているように思われる。脚付き盤、金属器の模倣とも考えられる無蓋高台坏、皿などは、Ⅵ期に出現する器種である。

したがって、有蓋高台坏以外はⅥ期の須恵器であり、Ⅵ期でも第2~4段階頃に対比されると考えられる。

さて、有蓋高台坏であるが、湖西古窯跡群ではⅥ期には生産量が激減し、箱型の坏が主流となるようである。しかし、清ヶ谷古窯跡群では、必ずしもそうした変遷をしないようである。先の水ヶ谷奥古窯跡の場合でも、古い要素と新しい要素は混在するものの、有蓋高台坏と箱型の坏とは併存しているようである。

K-1内出土の例を見ると、坏蓋は、湖西古窯跡群でいうⅥ期の特徴をそなえているものが目立つ。第8図1にしても、扁平な擬宝珠状つまみに近いとはいえ、Ⅴ期のそれとは異なっている。また、坏で見ると第8図14・15・20などは、Ⅴ期といい得るのかも知れないが、蓋とのセットを考えれば、大半はⅥ期に属すると考えなくてはならない。

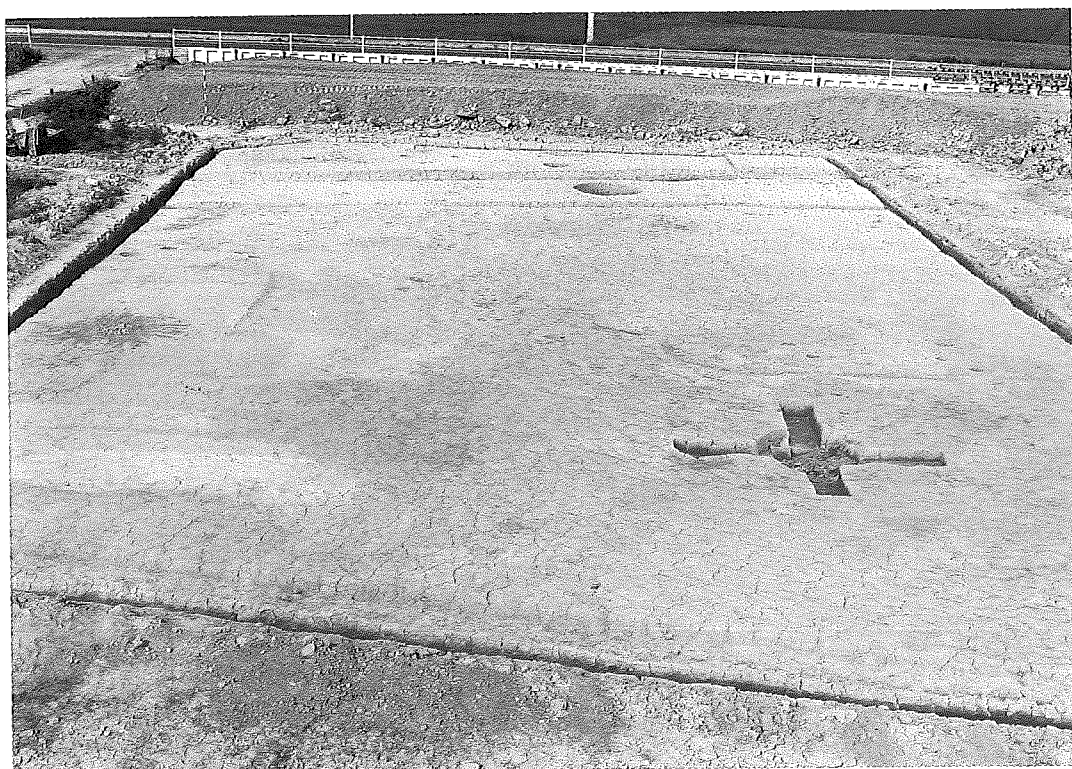
以上のような観察の結果、K-1内出土の須恵器は、基本的には湖西古窯跡群のⅥ期に併行するものと考ええる。

年代観については、責任を持って発言するだけの知識に乏しいが、一応、8世紀後半代と考えている。資料の集積と検討が進められれば、さらに正確になるであろう。

註

- (1) 柴田 稔 「青木、馬場第1・第2遺跡」 浅羽町教育委員会 1984
- (2) 松井一明 「坂尻遺跡」 袋井市教育委員会 他 1985
- (3) 竹山喜章 小柴秀樹 「坂尻遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990
- (4) 市原壽文 「清ヶ谷窯跡群水ヶ谷奥窯跡」 大須賀町教育委員会 1980
- (5) 栗田有城 「清ヶ谷窯跡群白山窯跡」 大須賀町教育委員会 1979
- (6) 後藤建一 「東笠子遺跡発掘調査概報」 湖西市教育委員会 1983
- (7) 浜松市教育委員会 「伊場木簡」その他 浜松市教育委員会 1976

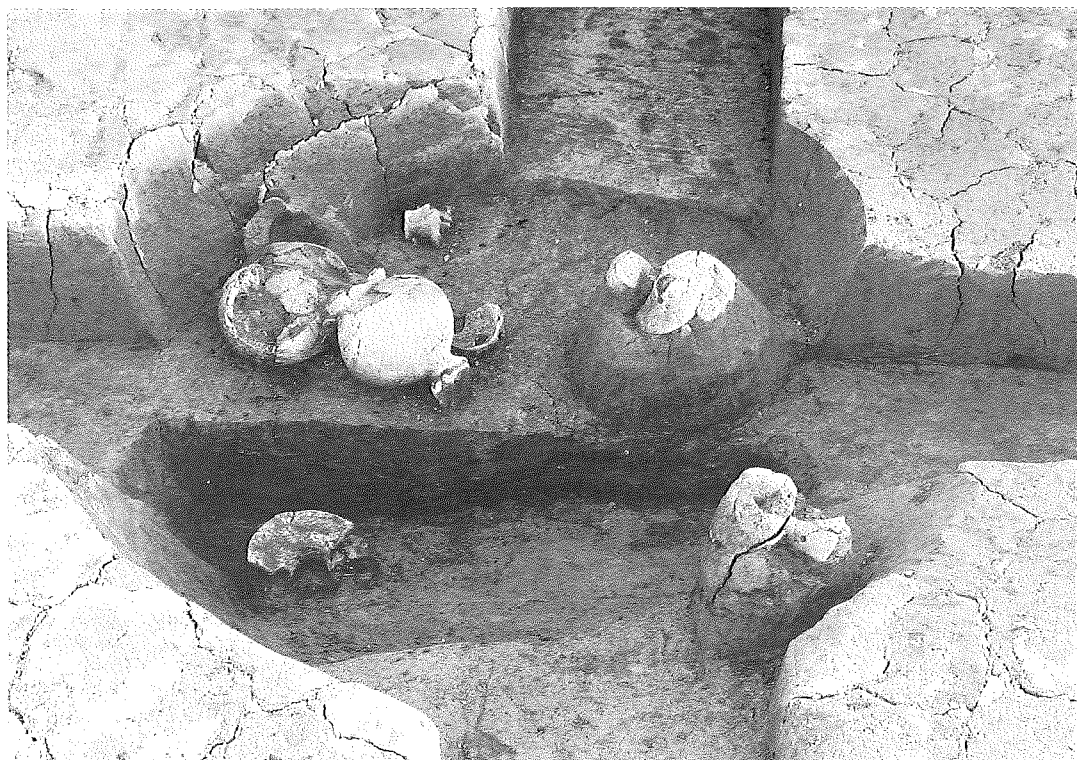
版 图



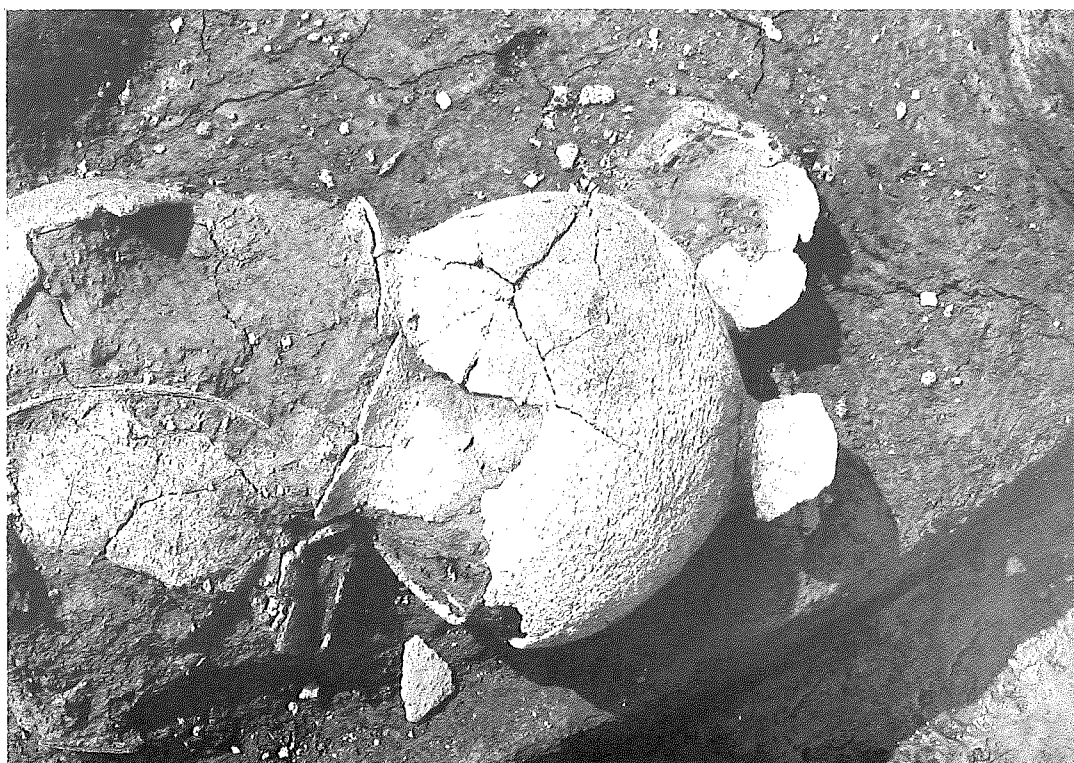
完掘状況（西側から）



J-1 調査状況（南側から）



D-1 調査状況（北側から）



D-1 遺物出土状況



E-1 完掘状況



E-2 調査状況



E-2・3, K-1・2 調査状況



E-3 遺物出土状況



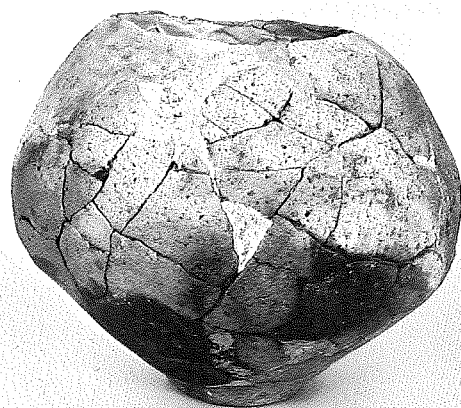
7-1



7-3



7-6



7-8



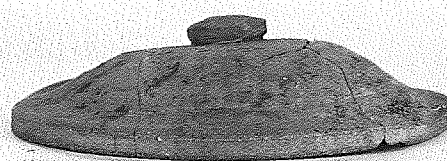
7-7



7-2

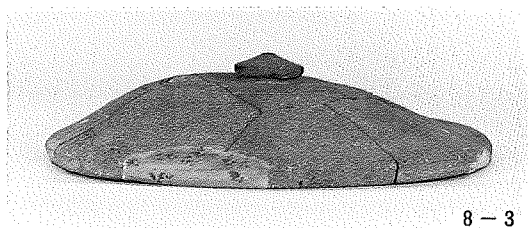


8-1



8-2

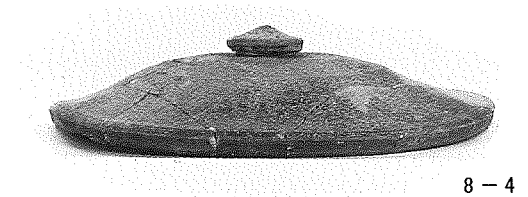
D-1, J-1, K-1 内出土遺物



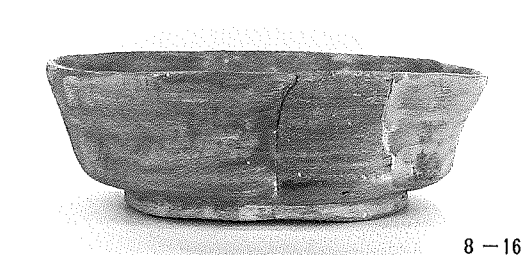
8-3



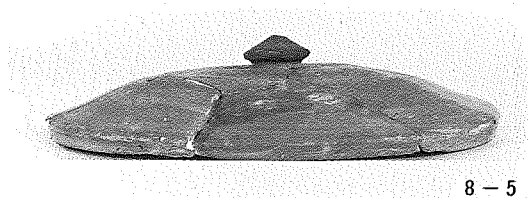
8-15



8-4



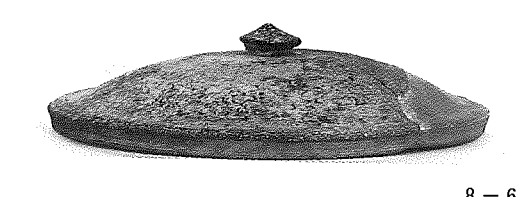
8-16



8-5



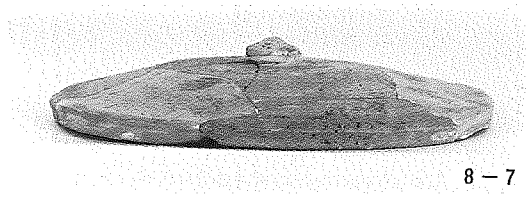
8-17



8-6



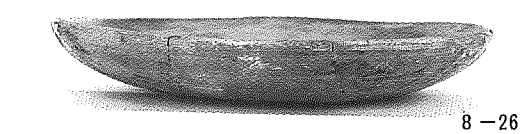
8-21



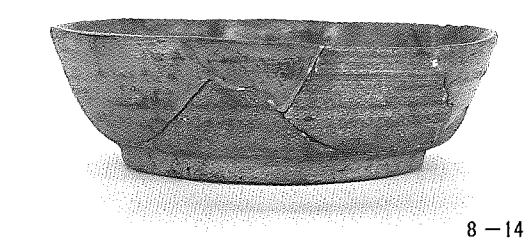
8-7



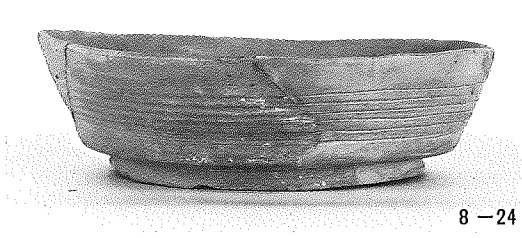
8-23



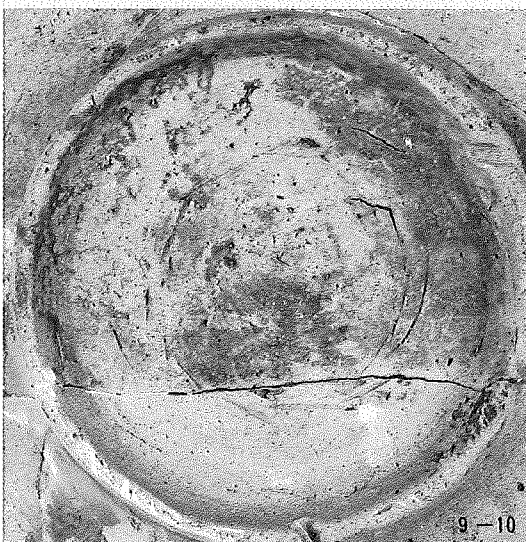
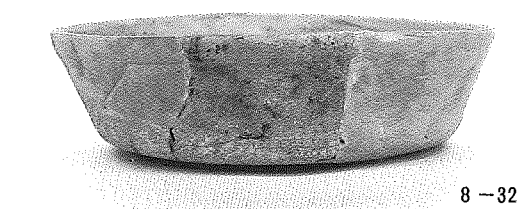
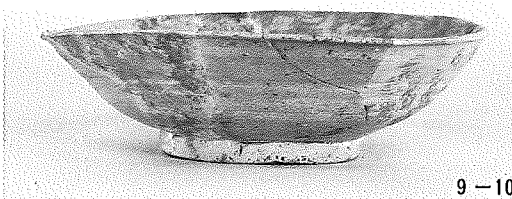
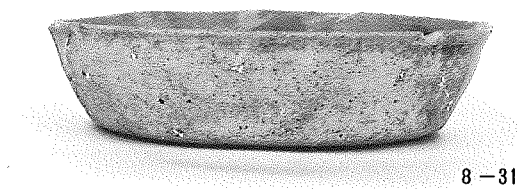
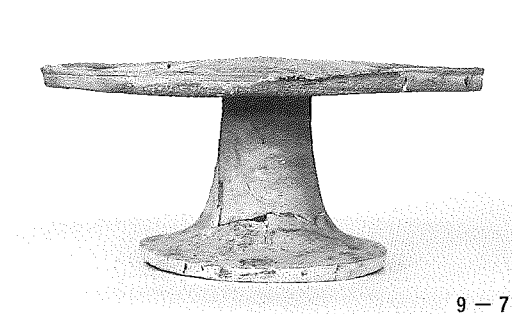
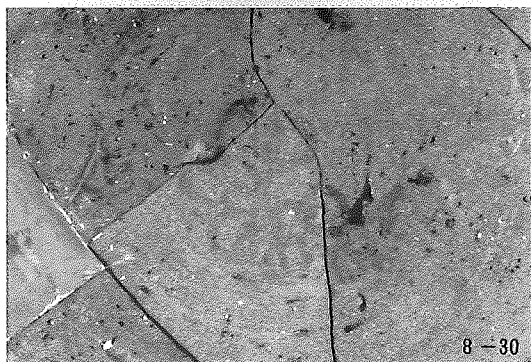
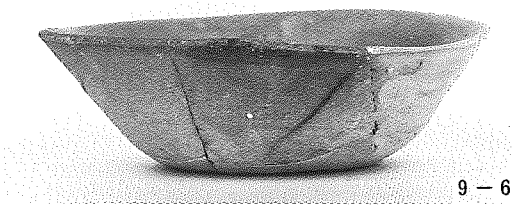
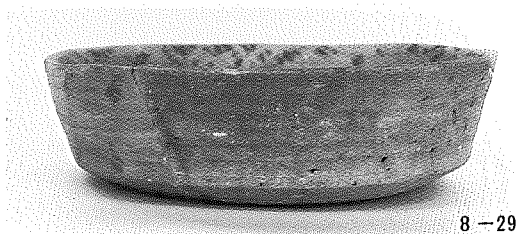
8-26

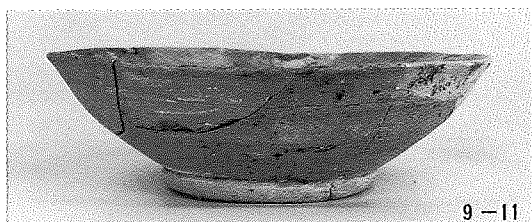


8-14

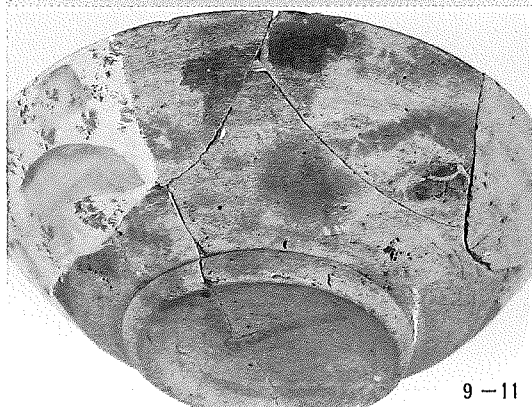


8-24





9-11



9-11



9-11



9-13



9-14



9-12



9-15

K-1, E-1・2内出土遺物

浅羽町学校給食センター建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北ハサマ遺跡

1991年3月30日

編集 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
発行

印刷 磐田市二之宮251
株式会社山田印刷所